第17巻第4号●通巻第104号●平成8年4月1日発行(毎月1回1日発行)平成7年2月27日第三種郵便物認可

SUPER HEAD MAGAZINE

DOLL

NO.104
1996 April
4

IGGY POP

COPASS GRINDERZ

BAD RELIGION

GREEN DAY

THE TRASHWOMEN

THE PHANTOM SURFERS

SEPULTURA

TOY DOLLZ

IGNITE

Theピーズ

KENZI&THE TRIPS

HELLBENT

THE STREET BEATS

WRENCH

BAD RELIGION interview

僕達はまだアンダーグラウンドにいると思う

INTERVIEWED: 有島博志　*PHOTO:* 池田倫弘

バッド・レリジョンにとっても、またファンにとっても衝撃的な事件となったブレット・ガーウィッツ脱退、ブライアン・ベイカー(元マイナー・スレット〜ダグ・ナスティ〜ジャンクヤード)加入から1年半、新布陣で制作された初の作品『ザ・グレイ・レイス』がいよいよ発売される。キャリア16年を誇るベテラン・パンク・バンド、バッド・レリジョンが、これ迄に築き上げてきた輝かしい功績、熱烈なファン層の上にあぐらをかくことなく、さらに前進、成長しようとした意欲作だ。このグレッグ・グラフィンのインタヴューは、昨年11月の上旬にニューヨークの『エレクトリック・レディ・スタジオ』で、彼らがまだ新作の制作を終えてない時期に取ったものだということを、お断りしておかなければならない。インタヴューをする前にコンソール・ルームで、まだ完全形になっていないものも含む新曲を6曲聴かせて貰い、その時得た印象を基にして話を進めた。なぜ、そのような早い時期にやることになったかというと、ご存知の通り、現在メンバーはそれぞれ違う町に住んでおり(グラフィンはニューヨーク、ブライアンはワシントンD.C.というように)、メンバー全員が一ヵ所に集まるのは、この時か、後はツアーに出る時しかない、という彼らならではの事情があったからだ。

――日本公演後は、主にどういったことをしていたんですか？

「日本から戻った後、新作の曲作りを少し行って、それからまたアメリカでツアーをやった。夏の間ずっと前作(『ストレンジャー・ザン・フィクション』)を引っ張っておくためにね。その後、新作の制作に本腰を入れた」

――その間に、ブライアンの加入によってよい方向へ変化したものというのはありますか？

「うん、いくつかよい変化があった。一番明確なのは、(ブレットより)ブライアンの方が優れたギタリストだということさ。だから、新作のギターの音作りは自分達の今までのどの作品よりも優れたものになった。もう一つは、僕がこれまでに感じたことのない責任を、強く感じるようになったことだ。結果的には僕が総ての曲と歌詞を書くことになったわけだけど、幸運なことにブライアンが助けてくれた。何曲か彼が貢献している曲があるけど、全体から見れば新作の曲は僕が総て書いたようなものさ。それゆえ、優れたものを作り出さなければならないというプレッシャーと責任感があった。でもその結果、新作は心で感じる部分が多くなったと思う。僕達のどの作品よりも感情が込められているよ」

――貴方達は前作から完全なメジャー・レコーディング・アーティストとなったわけですが、そのツアーなどを経験してみて、そういう意味での変化を感じましたか？

「いいや。誰が音楽を売ってるか、誰が音楽をマーケティングしてるかという部分に集中することはない。僕はもっと音楽を作る方に興味を持ってる。だから、メジャーにいようとインディペンデントだろうと、僕にとってはいい音楽を作るための問きと動機の方が大切さ。大変に励ってプレイするのは、まだ僕達の手の内にあることだから。毎晩観客に向かってプレイしているのはまだ僕達であってレコード会社じゃない(笑)。僕にとって大事なのはファンとの直接的な関係なんだ」

――生活面でも変化はありませんか？

「いいや、ないね。僕の生活水準というのは、自分達がまだエピタフに所属していた時代に設定されたものだから。家を買ったのもその時だし、車を買ったのもそう、既にその時から世界中を旅行していたしさ(笑)。だから、メジャー契約したといっても、僕のライフ・スタイルにはなんの関係もない。むしろ、優れた音楽を書いてそれを人々と分かち合おうという決意が固くなっただけのことさ。それに、バンドとしては僕達は色々な意味でまだアンダーグラウンドにいると思う。グリーン・デイやオフスプリングの作品を買った人の中には僕達の作品を買わない人も大勢いるし(笑)、そういう意味では僕達はパンクの世界でまだ発見されざる偉大な才能なわけだし、自分としてはこの在り方が気に入ってもいる。僕達は、今名前を出したようなバンドと比べればまだまだメイン・ストリームじゃない。それを誇りに思っているしね」

――新作の制作に取り掛かる前に、グレッグ・ヘトソンがサークル・ジャークスの再結成に関わり、『Oddities Abnormalities And Curiosities』(Mercury／日本未発売)を発売し、ツアーにも出ましたが、バッド・レリジョンの活動の方にも影響は出なかったんですか？

「ちょっと影響した。彼がツアーに出ている間にやることを見付けなきゃいけないという形で。それに、彼はバッド・レリジョンに自分の時間を注ぎ込む能力を確実に傷つけたはずだし。人のエネルギーは限られてる。他のバンドにそのエネルギーを注ぎ込んだら、メイン・バンドの方に注ぎ込む分にも影響が出てくるに決まってる。僕が総ての時間を大学に取られていた時と同じさ。あの時は僕もバッド・レリジョンに時間を注ぎ込むことができなかった。最近は総ての時間をこのバンドに注ぎ込むようにしているし、その影響がいい形の変化として現れてる。そんなわけで、彼は多くの時間を他のバンドに注ぎ込んだため、ちょっとストレスを感じていたようだ」

――相変わらず研究や大学での講義は続けているんですか？

「1人で研究は続けているけど、もう大学は離れた。だから、全面的な研究者というわけじゃない。でも、音楽で忙しい時には研究で楽しみを得ているよ」

――新作の曲作りにブライアンが関わったと言ってましたが、それはどの程度ですか？

「彼は曲のアイディアをいくつか提供してくれた。他のメンバーも一応関与しているけど、それは僅かでしかない。でも、ブレットと一緒に曲を書いている時は、お互いの間でバランスが保たれていたし、ブレットがカヴァーしていると思われる領域には敢えて立ち入らなかった。そんなわけで前作では特に、僕はパンク・ソングに止まっていた。ブレットがとてもポップな曲を書いていたのは承知していたから。新作では、そういう利他主義的な重荷は消えた。自分の創造性をとても広げることができたし、自分が何を書こうとしているのかあまり悩まずに済んだから、かえっていい曲が書けたよ。僕はソングライター総てに、ともに曲を提供している人間が何を書いているか気にするな、と提案したい。感情的にも感覚的にも満足の行くものを書いた方が、いいものが書けるからさ」

――新作のために何曲書いたんですか？

「19曲用意したけど、実際に作品に収録されるのは15曲さ(日本盤にはさらにボーナス・トラックが2曲追加収録される)。残りの4曲も出来はいいんだけど、もう少し手をかけた方がいいように思える。新作には一貫性がある。それぞれの曲が独自のムードを持っていながらね。そういう意味では、非常にユニークな質の高さがある。これといった弱点もないし、どの曲も特別なものなんだ。過去の作品には新作ほどの自信を持てなかった。先程、日本公演の後曲作りを始めたと言ったけど、それは間違ってる。僕達は日本公演の前に曲を書き始めていた。だから、新作は1年半の長さで僕の生活に関わっているわけさ。その間の様々な感情や感覚が反映されているんだ」

――さっき6曲聴かせて貰いましたが、特に「ザ・グレイ・レイス」と「パンク・ロック・ソング」の印象が強烈でした。前者はちょっと以前とは違う感じがするし、逆に後者はもろに貴方達ならではの、という感じですから。

「前者に関してはまさにその通りだ。あの曲を書いている時、僕も新たな領域に通じる扉を開いたと思ったから。何か新しいものだってね。「パンク・ロック～」は、バッド・レリジョンが描くところのパンク・ロックそのものさ。普遍的な事柄や人々に自問自答させるようなものを扱ってる。あと聴いて貰ったのが、アメリカン・ドリームの中で生きていくことの苦しさを歌った「ストリーツ・オブ・アメリカ」、人を敵として認識することの難しさについて歌った「ゼム・アンド・アス」、西暦2010年に世界の人口が100億になるという題材を取り上げた「テン・イン・2010」さ」

――今回プロデューサーにリック・オケイセックを起用していますが？

「前回起用したアンディ・ウォレスは非常に技術的なプロデューサーだけど、リックはもっとアーティスティックなプロデューサーなんだ。リックは正確さにはあまり興味がない。彼は、曲の知的発展の方に興味がある。アンディももちろん知的だし、アーティスティックだけど、その過程に違いがある。僕達としても、かつてバンドに所属していて、そのバンドがアーティスティックで創造的なプロデュースのスタイルを持っている人に興味を持っていた。それで、リックに頼んだんだ」

――リックは貴方達の音楽性を理解してくれましたか？

「共同作業的なものだったからね。彼が僕達を理解するための手助けをしなければならなかったけれど、こちらも彼のことを理解しなければならなかった。つまり、必要とされる過程だったんだ。時にはそういう過程がうまくいかないこともあるけど、リックとはとてもうまくいったんだ」

――最後に、新作で最も注意した点は何ですか？

「ライヴのエネルギーをうまく移し取るということに最も注意を払った。曲はメンバー全員が一緒にプレイしているから、ギターのオーヴァーダブは一切ない。バッド・レリジョンとしてこういうやり方をしたのは、『How Could Hell Be Any Worse?』以来初めてなんだ。皆が一緒にプレイしたし、お互いを見ながらプレイしたから、どこで強調したらいいのかも分かったし、そういうのが非常に重要だったんだよ、今回は」